様式第１号（第１０条関係）

2023 年度業務実績報告書

提出日 2024 年 1 月 18 日

１．　職名・氏名　教授　今井　朋実

２．学位　学位　修士、専門分野　社会福祉学 授与機関　カンザス大学
授与年　平成 10 年 5 月

３．教育活動

(1)講義・演習・実験・実習

① 担当科目名（単位数）　主たる配当年次等

現代福祉問題論（2 単位）1 年次、ソーシャルワーク演習１（1 単位）1 年次、ソーシャルワーク論Ⅲ（4 単位）2 年次、ソーシャルワーク論Ⅳ（4 単位）2 年次、精神保健ソーシャルワーク実習指導Ⅰ（1 単位）3 年次、精神保健ソーシャルワーク実習指導Ⅱ（1 単位）4 年次、社会福祉演習（2 単位）3 年次、卒業研究（4 単位）4 年次、社会福祉援助特論（個別）（2 単位）大学院 1 年次

② 内容・ねらい

講義・演習への取り組みについては、着任後 6 年目であり、これまでの取り組みを振り返りながら取り組んだ。昨年度から開始された社会福祉士養成教育の新カリキュラムへの移行のため、担当年度が変更になった科目があったため、昨年度同様、引き続き調整しながらの年度となった。

現代福祉問題論：１年生に対する教員の紹介を兼ねた講義科目であるため、ソーシャルワークとは何か、について基本的な概念の理解を念頭に講義を行った。

ソーシャルワーク演習１：初めて社会福祉の概念に遭遇する学生を対象に、これまで 2 年生を対象として展開してきたソーシャルワーク演習 1 を 1 年生に対してソーシャルワークの基本的な概念を交えて分かり易く授業を展開した。高校生から大学生への移行がソフトランディングされるように、講義ではありつつも、演習科目というコミュニケーションが主体となる科目であるため、学生の交流も兼ねる効果もあることが、学生のリアクションペーパーの感想からも伺えた。そこで、学生のコミュニケーション促進の役割は大きいものであると実感したため、基本的なソーシャルワークの理論を提示してそれを踏まえて演習の中でコミュニケーションを主体として深めていった。理論と演習は対か、あるいは表裏一体であると想定される。したがって、ソーシャルワークの基本理念・理論をある程度理解したうえでソーシャルワーク演習 1 が導入されることが望ましいと昨年度と同様思った。1 年生に演習 1 を導入した新カリキュラムの意義について、その背景にある理論をある程度説明してから、演習を行うことに意義があると再認識したため、意識して取り組んだ。

ソーシャルワーク論Ⅲ：ソーシャルワーク論Ⅲは 30 名の学生の講義科目である。前年度同様学生が押さえておくべきケースワークの歴史及び方法論、グループワークの歴史及び方法論について講義を展開した。

ソーシャルワーク論Ⅳ：ソーシャルワーク論Ⅳでは、ソーシャルワークの援助過程の実際に関して、2 コマ続きの１時限目は概念と方法論を提示し、社会資源を含めた制度運用の概観を紹介し、サービス利用計画については社会資源利用、社会資源開発、アセスメント、プランニング、チームワーク、ネットワークとの関連について講義した。それを踏まえて、2 時限目には 2 日間にわたり、地域包括支援に焦点をあてて、地域包括支援センターと障害者基幹相談支援事業所からゲストスピーカーを大学に招き、それぞれの機関の業務の概要と社会福祉士の役割について講義をお願いした。また、保健医療分野として、東京都新宿区を中心とした HIV・AIDS と STI の地域の包括的支援システムについて、ソーシャルワーク実践に関する知識と技術の獲得とそれらを教育と研究にフィードバックするため、現場との繋がりを持っていることから、それらの自身の経験を元に講義を行った。【ゲストスピーカー2 件】

精神保健ソーシャルワーク実習Ⅰ・Ⅱ：3 名の 3 年生、3 名の 4 年生の実習指導を行った。4 年

生の精神保健ソーシャルワーク実習では、福井県立病院（福井市）、加賀こころの病院（石川県加賀市）、緑ヶ丘病院（鯖江市）での病院実習と、地域活動支援センターつながり（越前市）、就労継続支 A 型えばた公房（福井市）、就労継続支援 B 型コミュニティまるおか（坂井市丸岡町）における地域実習での実習指導を行った。

社会福祉演習（ゼミ）：今年度のゼミの登録者は 6 名である。各自の興味のあるテーマに沿い、前期、後期を通して各自２回ずつパワーポイントの資料を作成し、発表して貰った。それ以外に、学生が興味を持った農福連携を実施する障害者施設の見学実施を行った。

【フィールドワーク１件】

卒業研究（4 年生）：今年度の登録学生は 7 名であった。昨年度の登録学生が 7 名であったため、上限を決めて 7 名まで受け入れた。指導の可能性と専門性を勘案したうえで、そのほかの学生にはその旨を伝え、ほかの指導教員を検討・熟考・選定して貰い、学生には上限いっぱいであることも併せて伝え、最終的に 7 名との決定になった。4 年生は精神保健福祉士受験資格を取らない場合、4 年生の授業が卒業研究のみとなることが多い。一方で精神保健福祉士受験資格を取る場合、5 月、6 月、7 月が実習期間となり、8 月の実習発表会まで卒業研究に着手できない状況が例年ある。そのため、4 月に卒業研究に向けての準備についてゼミで集中して提示し、各々着手し進めて貰い、人数も多いため、夏休み後半から、12 月の提出まで、毎週グループ指導体制でゼミを実施した。添削の時期になると、学生も教員も体調管理が大切になるため、10 月ぐらいから、執筆を章毎に各自進めて貰い、できた人から小分けで提出して貰い、添削を行った。

社会福祉援助特論（個別）：大学院科目の社会福祉援助特論（個別）については、北米の修士課程で一般的に使用される D.H. Hepworth の”Direct Social Work Practice”の訳本を用意して、4 名の修士課程の受講生を対象として講義を行い、ディスカッションを行った。訳本であることと、社会的・文化的背景が異なるため、読みづらい部分もある書籍であり、章の頁数のボリュームが多い中、全員が現在社会福祉現場従事者であり、業務を忙しくしているにも関わらず、各自入念に資料を準備し、プレゼンテーションを行い、活発な議論が出来た。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

現代福祉問題論：入学してからまだ１か月の新入生に対する講義のため、「ソーシャルワークとは」について分かり易く伝えることを心掛けた。

ソーシャルワーク演習１：昨年度からの新カリキュラム移行に伴い、1 年次の授業（ソーシャルワーク演習１）を担当しているが、昨年も同様の感想を持ったが、ここ数年の 1 年生は欠席や遅刻が目立ち、学生の状況への対応が余儀なくされた。学生の演習中の会話を聞くと、大学選択としては、元々は社会福祉の専攻希望ではないなど、モチベーションが持てない学生も見受けられ、入門演習などの担任の教員との連携の必要性を痛感する経験となった。学生の興味及び学習意欲は年度により異なるため、30 名（オムニバス形式で学生を奇数と偶数のグループに編成し、異なる教員が半分の 15 名×2 回の授業）を対象として、授業開始時期の学生の様子を観察することやリアクションペーパーにより学生の興味関心を知ることで前年の授業案を修正して授業を展開した。演習科目のソーシャルワーク演習１については、2 年次に学習予定のソーシャルワークⅢと連動させて、ソーシャルワークⅢで扱う内容についてソーシャルワーク演習１を対応させて概念を先に 1 年生で学ぶ機会を持って貰った。1 年生の新カリキュラムでは先に概念を学ばずして、演習 1 が始まるため、2 年生で学ぶことが想定されている内容について補足しながら、授業を展開した。学生にとって難解とも感じられる理論と応用（演習）を連動させることが理想ではないかと思っている。2 年生には、対応レベルの異なる事例をグループワークで行って貰い、事例を沢山積み重ねて考えて貰うことで、社会福祉実践の実際の考え方を涵養する機会を持って貰った。昨年にも増して学生が応用力に耐えうる能力を有していると実感したため、2 年生においても、より高度な事例にあたって貰い、経験してもらうことも可能であることが分かったので、来年度に参考にしたいと考えている。

ソーシャルワーク論Ⅲ：ソーシャルワーク論Ⅲでは、ケースワークの歴史及び方法論及びグループワークの歴史及び方法論について講義を展開したが、講義科目ではあるが、2 時限続きの授業であるため、アクティブラーニングの手法を用いて、1 時限には講義、2 時限には視聴覚教材やグループディスカッションの手法を対面授業で実施した。

ソーシャルワーク論Ⅲは 30 名の講義科目であるが、180 分という 2 時限続きの講義科目のため、

教育効果や学生の集中力に課題がある。過度な学生への講義時間の負担を回避するべきとの認識のもと、前半 90 分は講義とし、後半はディスカッションを実施した。そのあと、リアクションペーパーの時間を設けた。ソーシャルワーク論Ⅲは講義科目であるが 2 時限目に視聴覚教材の視聴やグループディスカッションなどのアクティブラーニングの手法を取り入れた。このような形式にすることよって、教育効果や集中力の課題について、学生には理解が深まるものとなり、時間を有効に使うことができた。

ソーシャルワーク論Ⅳ：講義とディスカッションの組み合わせで、アクティブラーニングの手法を取り入れて授業構成を工夫した。学生にとって難解とも感じられる理論と応用を連動させることができたのではないかと考えられる。また、対応レベルの異なる事例をグループワークで行って貰い、事例を沢山積み重ねて考えて貰うことで、社会福祉実践の実際の考え方を涵養する機会を持って貰った。昨年にも増して学生が応用力に耐えうる能力を有していると実感したため、より高度な事例にあたり経験してもらうことも可能であることが分かった。最前線且つ最新の地域包括支援に携わる 2 名のゲストスピーカーに話をして貰うことで、高齢者支援分野と障害者支援分野について地域包括支援についてこれまでの理解より深く理解が出来たと、リアクションペーパーに記述があった。

精神保健ソーシャルワーク実習指導Ⅰ・Ⅱ：担当して 4 年目である。引き続きその担当の経験を積み重ねていきたい。今年度は 3 名を担当した。2 名の学生が病院実習にて実習途中でパニックのような状態にそれぞれなった。どんなに事前学習をしたとしても、精神科における病院実習は学生にとっては、導入に苦慮することもある。それに対応するためには、実習指導者との緊密な連携が欠かせないが、現場の多忙さのレベルの違いにより、指導の濃淡があることがあり、且つ学生の特性により、学生に影響されることがある。学生が通える実習先が限定されることもあるが、実習先がどこでも良いわけではないため、取捨選択が必要であることを実感した。

社会福祉演習（ゼミ）：ゼミ担当の学生 6 名は、ソーシャルワーク実習のみ履修、ソーシャルワーク実習＋精神保健福祉実習、実習履修はなし、と 3 パターンの学生がいるため、全員のゼミの日程調整に苦慮した。このことから、各自のテーマを持ち寄り、ゼミ合宿を実施することにした。

卒業研究（前期・後期 4 年生）： 卒業研究（4 年生）は 7 名担当した。卒業研究では、卒業論文作成と仕上げの指導と、4 年生の就職活動と日頃の生活が円滑に行われているかをモニターする役割がある。7 名の就職先は、病院 3 名、障害者施設 1 名、高齢者・障害者・児童複合施設 2 名、一般職（大学事務）1 名である。

今年度の学生の卒業論文のテーマは、①「在宅介護における家族介護者の介護負担と虐待との関連～地域における認知症高齢者の家族介護者に対する支援～」、②「高次脳機能障害者と家族、支援者が感じる困難さを考える」、③「子どもの摂食障害～摂食障害と親子関係の関わり～」、④「日本の LGBTQ の歴史～多様性の変遷～」、⑤「アダルトチルドレンの生きづらさを解消するために～アルコール問題家族と機能不全家族との関係性～」、⑥「国内の社会的処方の可能性～社会福祉とソーシャルワークに焦点をあてて～」、⑦「認知症高齢者を地域で支える～認知症サポーターの現状と課題」であった。前期から後期にかけて夏休みの一部を除き、卒業研究のゼミを毎週実施し、各自纏めてきた進捗内容を、プロジェクターでスクリーンに映し出し、発表して貰い、映し出された資料をお互いに観ながらディスカッションを進めて行った。学生の論点がクリアになり、また相互学習を促進することにもなり、卒業研究を仕上げるにあたって、相互に学びながら進めることができたと考えられる。7 名は平均すると規定の 15 枚を超えた 20 頁以上を執筆し、中には 40 頁、70 頁超の学生もいた。

社会福祉援助特論（個別）：今年度の履修者の大多数は、ZOOM ではなく対面授業を希望したため、1 名は ZOOM 参加の希望日もあったことから、オムニバス形式で対応した。輪番制で作成されたプレゼンテーション資料により、活発な議論が展開された。

(2)その他の教育活動

内容

男子アイスホッケー部顧問（令和元年 4 月～現在に至る）

農福連携の障害者施設との連携による教育活動（社会福祉演習）

４．研究業績

(1)研究業績の公表
① 著書 【０本】
② 学術論文（査読あり） 「若年性認知症の人とその家族を対象としたデイサービス・デイケアに関する先行研究の検討と課題」社会環境論及第 15 号、社会環境学会、2023 年 4 月発行 今井朋実（単著） 【１本】
③ その他論文（査読なし） 【０本】
④ 学会発表等 （１）座長：第 24 回日本認知症ケア学会、特別企画 2-K（理学療法士）:認知症ケアにおける理学療法士の役割　群馬大学保健学研究科　*山上徹也　2023 年 6 月 4 日、於京都国際会議場 【１件】
⑤ その他の公表実績 【０本】
(2)科研費等の競争的資金獲得実績
(3)特許等取得
(4)学会活動等
社会環境学会　理事

５．地域・社会貢献活動

①社会福祉法人　福井県社会福祉協議会　福祉サービス第三者評価決定委員会（高齢者福祉施設分野小委員会）（令和２年４月～現在に至る）
②静岡県福祉サービス第三者評価　評価調査者（平成 18 年から現在に至る）
④　東京都保健所（新宿東口検査・相談室）相談員（平成 15 年から現在に至る）

６．大学運営への参画

(1)補職
(2)委員会・チーム活動
入試本部委員（令和５年４月～現在に至る） 大学院入試広報検討チーム活動（看護福祉学部）（令和４年４月～現在に至る）
(3)学内行事への参加
羽水高校入試説明会（説明会での看護福祉学部のプレゼンテーション） 大野高校入試説明会（説明会での看護福祉学部のプレゼンテーション） 北陸高校入試説明会（説明会での看護福祉学部のプレゼンテーション）
(4)その他、自発的活動など